

道 徳 科 学 習 指 導 案

令和6年6月13日(木) 学習指導Ⅰ 第2学年3組(1年1組教室) 指導者 横尾 紗也香

【主 題】 みんななかよし(内容項目B「友情, 信頼」) 『およげない りすさん』(光文書院)

考察	道徳的価値についての理解 (学習活動)	自己の生き方についての考え (学習活動)	道徳性(育成を目指す資質・能力) (道徳的判断力, 道徳的心情, 道徳の実践意欲と態度)
育成を 目指す 資質 能力	・友達と助け合って仲よく活動すると楽しいという道徳的価値理解, 自分とは得意なことが異なる友達と助け合って活動できないことがあるという人間理解, 友達と助け合って仲よく活動できたりできなかったりする場合の感じ方や考え方は多様であるという他者理解をすること	・自己の生活経験を基に, 友達と助け合って仲よく活動することのよさや難しさについて友達や教師と話し合いながら自分事として考えること	・自分とは得意なことが異なる友達とも助け合って仲よく生活したいという道徳的心情を養うこと
子どもの 実態	・1年「二わのことり」では, 友達の気持ちを考えて行動すると仲よくなれるというよさ, 友達の気持ちを考えられず仲よくできないことがあるという人間の弱さ, 友達の気持ちを考えて仲よくできたり, 考えられず仲よくできなかったりした場合の感じ方や考え方が多様であることを学習してきた。	・1年「二わのことり」では, 自己の生活経験を基に, 友達と仲よく活動することのよさについて, 友達や教師と話し合いながら, 自分事として考えてきた。	・友達よりも自分の興味や関心, 思いが先行してしまい, 友達を助けられなかったり, 自分の苦手なことを認められず, 友達の助けを素直に受け入れられなかったりして友達と助け合えないことがある。
価値	・友達と助け合って仲よく活動することは, 大切である。なぜなら, 子どもたちにとって友達の存在は大きく, 友達関係の状況が生活の充実度を左右することも少なくないからである。子どもたちは, 家庭や学校, 習い事などの中で人と関わって生活しているが, 家族に次いで長い時間をともに過ごし, 深い関わりをもつのが, 友達であると考え。家族や指導者と異なり, 発達段階が同様の友達とは, できるようになったことやまだできないこと, 興味や関心が近く, 気が合うことも多いが, けんかになってしまうことも少なくない。しかし, 友達とけんかをしても, 友達の気持ちを考え, 仲直りをする経験を経て, 友達との仲は深まっていく。また, 友達とともに学んだり遊んだりしていく中で自他の苦手なことに直面したときに, 互いの違いを受け止め, 助け合っていくことでできることが増え, 互いに成長することができる。そして, 互いの成長を喜ぶとともに, 友達のよさや大切さをより強く感じられるようになるため, 友達との仲はより深まり, 生活は, より楽しく充実したものとなる。しかし, 2年生の子どもたちは, 友達と助け合って仲よく活動することがよいと感じつつも, 自分の興味や関心に夢中で, 友達の立場や考えに気付かなかったり, 気付いても, 友達よりも自分の興味や関心, 思いを優先してしまったりすることで, 友達を助けることが難しいことがある。さらには, 自分に苦手なことがあり, 友達に助けられる立場になることもあると気付いていなかったり, 自分の苦手なことを認められず, 友達の助けを素直に受け入れられなかったりすることがある。これでは, 友達との仲をより深めることは難しい。そのような子どもたちが, 自分とは得意なことが異なる友達がいても, 助け合って活動することのよさや難しさについて考えることで, 自分にも友達にも苦手なことがあることや, 友達と助け合って仲よく活動する楽しさや大切さに気づき, 自分とは得意なことが異なる友達とも助け合って仲よく生活したいという道徳的心情を養うことができる。		

・本教材は、池の中の島で遊びたいあひる、かめ、白鳥が、一緒に島へ連れて行ってほしいというりすの頼みを、りすが泳げないからという理由で断る話である。子どもたちが友達と遊ぶ場面でも、自分の得意な遊びをしたいという思いが先行し、自分と得意なことが同じ友達とだけ遊んでいることがある。自分と得意なことが同じ友達同士で遊ぶ楽しさもあるが、時にはその行動によって、自分とは得意なことが異なる友達を仲間外れにして傷つけてしまうことがあると気付いていなかったり、気付いても、一緒に活動する方法を考えられなかったりする。しかし、泳ぐことができないりすを置いて、泳げる友達同士で島へ行って遊ぶあひるたちの姿や、一人ぼっちになったりすの姿から、自分とは得意なことが異なる友達とは一緒に活動しないことについて、問題意識をもつことができる。また、それを自分の生活と照らして考えることで、自分とは得意なことが異なる友達とは一緒に活動しないことがあるという弱さが、自分にもあると気付くことができる。そして、あひるたちがりすは連れて行かずに島で遊ぶ場面や、翌日にりすに謝り、かめの背に乗せてみんなで島へ行った場面の、あひるたちやりすの心情に着目したり、自己の経験に置き換えたりしながら課題を追究する中で、友達を助ける側と友達に助けられる側から、多面的・多角的に友達関係について考えることができる。その中で、友達と助け合うことで、互いのできることが増えて生活がより楽しくなるというよさや、みんなで一緒に活動できる楽しさ、友達との仲が深まるというよさに気付くことができる。そして、友達と助け合って仲よく活動することの楽しさや大切さに着目しながら、よりよい自己の生き方を考えることができる。

見方・考え方

友達と助け合って仲よく活動することについて、自己との関わりで多面的・多角的に捉え、これからの自己の生き方について考えること。

今後の学習

3年「ないた赤おに」で、自分の利害にこだわらず、友達のことを思い、よりよい関係を築く大切さについて考える学習へと発展していく。

他の教育活動との関連

・友達と助け合って仲よく活動することについて

例：授業において、計算の仕方を互いに教え合いながら、隣の席の友達と一緒に課題に取り組むことについて

リレー大会に向けた練習において、バトンパスの仕方について互いに助言し合いながら、友達と一緒に練習することについて

校外学習において、榛名湖の周りを班で散策する際に、歩くペースを合わせたり、励ましたりし合いながら、友達と一緒に歩くことについて

本時の学習（１／１時間目）

ね ら い 自分とは得意なことが異なる友達がいても、助け合って活動する理由について話し合う活動を通して、友達と助け合って仲よく活動する楽しさや大切さに気付く、自分とは得意なことが異なる友達とも助け合って仲よく生活したいという道徳的心情を養う。

評価の視点 自分とは得意なことが異なる友達がいても、助け合って活動する理由について、教材の登場人物の心情や状況、自己の生活経験を基に、多面的・多角的に考えたことを発言したり、記述したりしている。 <発言・タブレット>

学習活動と子どもの意識	指導上の留意点
１ 教材を読み、学習課題をつかむ。 ・休み時間は、昨日も一昨日も、その前も、〇〇くんや△△くんとサッカーをして遊んだよ。いつも同じ友達と遊んでいるな。他の子はサッカーができなかったり、サッカーで遊びたくなさそうだったりするんだよね。 ・僕は、同じようにサッカーが得意な友達同士で遊ぶことが多くて、サッカーが苦手な友達も誘おうとしたことがなかったけれど、あひるさんたちはりすさんも遊びに誘っているな。どうしてだろう。（課題意識）	○得意なことが同じ友達同士で遊ぶことが多いことに気付けるよう、事前に聞いていた最近の３日間で遊んだ友達とその内容についてのアンケート結果を提示し、いつでもみんなで遊ばない理由を問いかける。 ○教材の登場人物が、得意なことが同じ友達同士で遊ぶのではなく、泳げないりすも遊びに誘ったことを把握し、りすの苦手なことを助け合い、みんなで一緒に遊ぼうとしたことに関して問題意識をもてるよう、教材を範読し、りすを誘ったあひるたちと自分とを比べるよう促す。
学習課題：どうして、りすさんも誘って、みんなで遊ぼうとしたのだろう	
２ 学習課題の解決に向けて話し合う。 ・仲間外れはだめなことだし、りすさん抜きで遊んでも、一人でいるりすさんのことが気になって楽しめなかったから、りすさんも誘ったんだと思うな。 ・みんなの考えはいろいろありそうだな。今日は、りすさんやあひるさんの気持ちになって考えたり、自分ならどうするか考えたりしながら、みんなの生活がよりよくなるような考えを、友達と話し合ってみて見付けていきたいな。 ・りすさんが池に落ちないように気を付けて島に連れて行くのは大変だし、時間もかかるだろうから、その分遊べる時間は減ってしまうかもしれないけれど、りすさんも一緒に遊んだ方がいいよ。その方が楽しいし、助け合って島に行ったら、みんながもっと仲よくなれそうだからね。 ・足が速い人同士で鬼ごっこをしたり、折り紙が得意な人同士で遊んだりするのは、遊び方を知っているから、すぐできて楽しいんだよね。でも、同じことが得意ではない子のことまで考えられていなかったかも。 ・わたしはボールを投げるのが苦手だから、みんながドッジボールで遊ぶときは、遊びに入りにくいな。誘ってくれないと、遊びに入れないよ。 ・自分にも、みんなにも、苦手なことってあるよね。そんな時に、お互いに声をかけて、友達と助け合っていきたいな。そうすれば、もっと仲よくなれるし、毎日が楽しくなりそう。（課題を解決した意識）	○自分とは得意なことが異なる友達がいても、みんなで助け合って活動する理由に対する考えを明確にできるよう、自分の考えをタブレットに端的に記述するよう促す。 ○「友達の考えにはよさがある」「友達の話を聞きたい」という意識を高められるよう、子どもたちの記述した考えを提示して、本時における考えの多様さを取り上げた後、「道徳科を学ぶよさ」を基に話し合いの進め方について問いかける。 ○友達の苦手なことを助け合うよさに気付けるよう、りすさんを助けてまで、みんなで一緒に遊ぶことの是非を問いかける。 ○助け合って活動する難しさを自分事として考えられるよう、導入で板書した、子どもたちが最近行った遊びを指差しながら、いつでも友達と助け合って活動しない理由を再度問いかける。 ○自分にも苦手なことがあり、友達に助けられる立場になることがあると気付けるよう、苦手な遊びに参加するときの気持ちを問いかける。 ○自他の苦手なことを互いに助け合って活動していこうとする意欲を高められるよう、得意なことや苦手なことが多様な身の回りの友達との接し方を問いかける。 ○本時に学習したことを自己との関わりで考えられるよう、「友達と話し合って考えたこと」「これからのこと」という視点で自分の考えをタブレットに記述するよう促す。
３ 本時の学習の振り返りをする。 ・助け合って一緒に活動すると楽しいし、もっと仲よくなれるね。できないことは友達と助け合いながら、これからもみんなで活動していきたいな。	